

# 面影

ハーン先生の一周忌に

小川未明

青空文庫



独り、道を歩きながら、考えるともなく寂しい景色が目の前に  
浮んで来て胸に痛みを覚えるのが常である。秋の夕暮もりの杜の景色  
や、冬ふゆがれ枯野辺の景色や、なんでも沈ちんうつ鬱な景色が幻のように見  
えるかと思うと遽たちまち消えてしまう。

消えてしまった後は、いつも惘ぼっとして考えるのである。なんで  
こんな景色が目に見えるのであろう。誰のことを自分は思ってい  
るのか？ 気に留めて考えれば空くう漠ぼくとして、悲しくも、喜ばし  
くもないが、静かに落付ていると胸の底から細い、悲しい、囁ささやき

のように、痛むともなく痛みを覚えて、沈鬱な寂じやくまく 寞まくたる夕暮の田園の景色などが瞭ありあり々々と目の前に浮んで来る。

ああ、自分はなぜこんなに悲しい気になるのであるだろうか。もうもう彼女かれのことは思い切っているのにと自みずから心を励はげますけれど、熱い涙が知らずにぽたぽたと落ちる。物の哀れはこれよりぞ知るとよく言ったものだ。自分は曾かつて雑司ヶ谷の鬼子母神きしもじんに参詣して御みくじ鬮を引いたこともあつたが……やはり行末のことや、はかない恋をそれとも知らなかつたからである——この道を行けば、やがて鬼子母神の境けいだい内に出るのだが、もう草は枯れている。圃はたけのものも黄ばんでしまった。なんだか斯こう、彼女の面影が目に見えて来る。そういえばこの道を去る秋、共に通つたことがあつたので

ある。

ああ、もうもう思うまい思うまい、悲しいんだやら、こう気が焦いらだつてくるばかりで、やはりこれが悲しいんであろう。涙が知らずには湧いて来る。

どれ、ハーン先生の墓にでも詣まろう。……

## 二

思えばおととし一昨年、ちょうど季節は夏の始めである。青葉の杜を見ても、碧へきしよく色の空を見ても何となく、こう恋人にでも待たるるような、苦しいかと思うと悲しいような、又物哀れな慕わしげな

氣持のする頃であつた。

自分は学校の窓から裏庭うらての羅漢松くさまきの芽の新なる緑を熟じつと見入みいつて色々の空想に耽ふけつていた。するとベルが鳴つてハーン先生が来たのである。この日初めて先生の顔を見るのだ。

先まず空想に浮んだのはこの人が希臘ギリシヤに生れ、西印度にしインド諸島や、その他諸方を流浪して来たと云うことである。背の低い 眇びようもく目めの、顔かおつき付けのどことなくおっとりとした鼠色の服を着ていなさる、幾人の兄けいてい弟ていや、姉妹があり、父や母は何処いずくにどうして、而そして真面目な恋もあつて、それが成就しなかつたのではあるまいか。などと種いろいろ々の空想を廻めぐらしていた。やがて講義が終えてから、運動場に出て、羅漢松の木蔭の芝生の上に腰を下して漫まんまん々たんたる

碧空に去来する白雲の影を眺めていると、れいどう靈動する自然界が、  
おのずか自ら自我に親しみ来るように思われる。そこいなきまる円い空、寂し  
 そうな白雲、たもと袂におとずれる風のささやき。雲を踏み、海を渡り、  
 親もなく、兄弟もなき異郷に漂浪する、先生の身が可哀そうにな  
 って来る。今も尚なお優しい余韻のある、情熱の籠っている講義の  
 声リズムミカルが律呂的にみみもと耳許に響いているような。  
 而して熟つくづく々と穏かな容かおつき貌が慕わしうなり、又自分も到底こ  
 の先生のようにではないけれど、やはり帰趨きすうなき、漂浪児であると  
 いう寂しい感かんじになった。

\*

\*

\*

この光荣ある詩人が、遽にわかに永劫の楽園を慕うて 沈サイレンス黙の海  
に消え、紫色の……さながら夢のような……さながら消えた悲み  
のような、遠いまた杳はるかな島山蔭の波間に見える、永劫の夏の浄  
土に憧がれ、漕こいで行つてしまわれた夕暮、我れは悲しみにたえ  
やらず、君の行方なつかしく、美しい茜色の西の大空を、野越え、  
山越え、森越えて眺めやり、松しようじゆ樹影暗く繁る、瘤こぶでら寺の、湿しめ  
れる墓畔ぼはんに香を焼たいて、縷るる々として寂じやくまく寞の境に立ち上る、細  
い細い青烟けぶりの消えゆくを見るも傷ましく、幾たびも幾たびも空想  
を破る鐘の響ひびきに我れ知らぬ暗涙をたたえたことであつた。——思  
うともなく、その日のことが思いだされて、未だにその時の光ありさ



景が瞭々<sup>ありあり</sup>と目に浮んで来て堪えられぬ。

三

この春のことであつた。北国のある町を歩いてみると立<sup>たて</sup>琴<sup>ごと</sup>の  
 ようなものを鳴らして乞食が通るのを見た。その男の容貌がいか  
 にも「日まわり」の一章に読<sup>よん</sup>だ乞食と似ている。何となく悲しく、  
 鳴らしている立<sup>ね</sup>琴<sup>ね</sup>の音を聞きつつ、空想に耽<sup>ふけ</sup>つているとその男の  
 姿は遠くなつて見えなくなつた。……ああ、彼も漂<sup>さすらい</sup>浪<sup>いびと</sup>人かと思  
 うと、つい熱き涙が目の中に湧くのであつた。

ハーン先生の文は、この琴の音の人をひく力のようにどこか哀

れな寂しい、細い澄んだ響きを伝えていた。——何となく沈痛！

何となく悲哀！ の響きがある。

人生には<sup>せいさん</sup>悽慘の気が浸透している。春花、秋月、山あり、水あり、<sup>あか</sup>紅、<sup>あや</sup>紫と<sup>きら</sup>綺羅やかに複雑に目も文に飾り立てているけれど、<sup>き</sup>帰する<sup>ところ</sup>処沈痛悲哀の調べが<sup>つきまと</sup>附纏うて離れぬ。酔うたる人は醒むる時の来るが如く、<sup>たのし</sup>楽める者、<sup>おご</sup>驕れるもの、<sup>よろこ</sup>悦べるもの、<sup>まぬか</sup>浮かるもの早晚傷み、嘆き、悔い<sup>うれ</sup>憂うる時の来ることを<sup>まぬか</sup>免れない。

誰か青春の美酒に酔うては歌わざらん。誰か<sup>ちやうらく</sup>凋落の秋に<sup>お</sup>遭うては<sup>さんび</sup>酸鼻せざらん。人生酔うては歌い、醒めては泣く、<sup>なかんず</sup>就中<sup>く</sup>余は<sup>こしゆき</sup>孤愁<sup>ま</sup>極りなき、<sup>ごと</sup>漂浪人の胸中に思い到る毎に堪えがたき哀れを感じて、無限の同情を捧ぐるのである。

さすらい人！ かなれば君独り愁え多きや。飛ぶ雲の影を見  
 れば故郷の山を思い、うららかなる春の日に立つ野山の霞を見る  
 時は、ありし昔の稚子おさなごの面影を偲しのぶ。里川さとがわの流れ 迢ちよう々ちようた  
 るも目に浮び、何処いずこよりか風のもて来る余韻悲しき、村少女むらおとめの  
 恋の小唄も耳に入る。……故郷を離るる幾百里、望めば茫々ぼうぼうと  
 して空や水なる海、山の上にも山ある山国に母を憶おもい、父を憶う  
 て、恋しき弟妹はらからの面影を偲しのぶ心如何いかならん。

さすらい人！ かなれば君独り愁え多きや。男子いやく苛しくも志を立  
 てて生活の戦場に出いで人生に何等かの貢獻こころみを試こころみと決したる上は、  
 たとえ腸九はらわたたび廻り、血潮の汗に五体は涵ひたるとも野に於いて、市  
 に於いて、鋤すきに、鋤くわに、劍けんに、筆ふんじんに奮あえ迅かいなの苦闘あえを敢あえてする腕かいなも、

勇氣もあるものの、只ただ彼の浮世の風波に堪え得ぬ花の如き少女、  
 おお、我が恋人は今頃いかに、今宵こよいをいかに送るならんと空の彼  
 方、見よ月に雲のかかり、忽たちまち勇氣の挫くじけて暗やみに落ち行く心地せ  
 らる。……煩悶はんもん……懷疑……ああ、いかなればさすらい人！  
 かく君独り愁え多きや。

ラフカディオ・ハーン先生はた一個のさすらい人であると思う。

\*

\*

\*

見渡せば霞立つ春の海原。波静かなる、風穏かなる、夢にも似  
 たる青き遠山を見るにつけ、黄色なる入江の沙さじょう上の舟や、灰色

の市街を見るにつけ、子の文章を思い起すのである。

北国の春の空色、青い青い海の水色、澄みわたった空と水とは藍を溶としたように濃淡相映じて相連あいつらなる。望む限り、縹ひょうびよう、縹ひょうびよう、地平線に白銀の輝ひかりを放ち、恍ことうとして夢を見るが如し。彼の浦島太郎が波間に浮べる、故郷の山影の、夢のような景色を眺めたのも、こうであつたらう!! 「夏の日の夢」の記を読んで、今、記憶に残っているのは左の一節である。

≡ Summer days were then as now, —— all drowsy and tender blue, with only some light, pure white clouds hanging over the mirror of the sea. ≡

日本海の風に吹かれて、滄浪そうろうの寄せ来る、空の霞める、雲も見えず、麗うらちかなる一日を海辺にさまよい、終ひねもす日空想に耽ひねもすつてい

たことがあるが、その時子の文章と閱歴とを思い出さずにはいられなかつた。赤、黄、緑、青、何でも輪郭の顯著なる色彩を用い、悠々たる自然や、黙静の神秘を物哀れに写す力があつたのが彼の人の特長である。

自分は希臘の海を見ないけれど、我が春の海を見るたびに何となく懐かしく思う。ああ、緑なる空。青き海原を見れば希臘の空を思い、悠々と白き雲の飛ぶ影を見れば、さすらい人を思い、月の光を見ては愁え、貝を拾うては泣き、悲しく吹く風に我が恋人の身の上を思い煩らうのである。

## 四

ただ独り、黄ばんだる林の下道を歩いて、青い空の見える淋しい湿り勝しめがちな小道を行くと、涼しい秋の風が身に浸み、何となく痛みを胸に覚ゆるのである。広い圃の中に出ると、小春日に、虚空を赤蜻蛉あかとんぼが翻ひらひら々と、かよわく飛んでいるのやら、枯れた足元の草の上に止とまっているのもある。遠く、うす黒き烟けむりの、大空に溶けるように上のぼっているのも見える。けれど何等の響きも聞えない。左に小道を折おるれば、例の墓所はかしよに出るので、誰れ見るともなく、静かな秋はいつとなく暮くれて行くのである。

自分はこの眩まぶしいような空を眺めて、何となく悲しくなった。

ある日、講義の時間に「とんぼつり、今日はどこまで行ったや

ら」の句を、

“Catching dragon-flies! …… I wonder where he has gone to-day!”

詩人の情のこもれる、やさしい声で而も物哀れに語られたことがあった。而してその時に自分は稚児が現世ならぬ薄青い夢の世の熱い夏の真昼頃、なんでも広い広い桑畑でただ独り、その裡をさまよいながら、蜻蛉を取っている姿のありありとして見られたのである。

\*

\*

\*

不思議なるは人生の行路、誰か自分の運命を知るものがあるろう。



……ふりさけ見れば千万里、海や、雲を隔てて異郷の土に冷かに  
眠るさすらい人の身を哀れむのである。而してもう、あの柔和な  
面影は再び見られない。艶麗な筆も既に靈なきものとなつた。

ただ永劫に吹く風の、悲しい余韻を伝えるばかり。

自分は茫として人の身の上を思うていたが、やがてまた我が身  
の上を悲しく感ずるのである。光明の郷に憧がれて、迷う孤雲の  
如く、幽かなる光を放ち、漫々たる西の大空に浮ぶ。暗、愁え何  
処に果は落ち行くであろう。……うす紫に匂う、希望の星の光は  
遠い。……去年の秋、この道を歩いた時は、恋しい影が従いてい  
たものを……今は思いにやつれしさすらい人！

いでやこの涙を捧げものにして詩人の墓を訪おう。……ああ、

おそろしい風！  
このあたりは落葉で径<sup>みち</sup>も見えぬ。

# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑  
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本 小川未明小説全集」小説集※「#ローマ  
数字1、1-13-21」講談社

1979（昭和54）年4月6日第1刷発行

初出：「家庭新聞」

1905（明治38）年9月

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 面影

ハーン先生の一周忌に

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 小川未明

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>